

大学における教養教育を考える

—教養の地理学の可能性—

村山朝子

1. はじめに

新制大学に専門教育と一般教育が設置されて以来、地理学は一般教育の選択科目に位置づけられてきた。1991年の大学設置基準の大綱化により、一般教育の再編が進められている。一般教育という名称そのものが消えつつある現在であるが、大学前期の学生に対して、専門教育とは独立した教養教育を行うことの意義を、今一度検討する必要があるのではないだろうか。

筆者は、複数の大学および短大で非常勤として教養教育の地理学関連科目の授業を担当する機会を得て数年になる。地理学を専攻しない大勢の学生を相手に、地理学の何をどのように扱ったらいいのか、学生のどのような変容を期待するのか、そして学生たちはどんな授業を望んでいるのか、問い直しては試行錯誤の日々である。浅く未熟な経験ではあるが、これまでおこなってきた教養の授業実践をふまえて、本稿では、大学における教養教育のありかた、教養教育としての地理学の可能性についての考察を試みるとともに、一授業実践について報告したい。

2. 教養教育と地理学

(1) 一般教育の解体

1991年の大学設置基準の大綱化を受けて、一般教育・専門教育の区分が解体され、すでに多くの大学でカリキュラム改革が実施されている。カリキュラム編成が各大学の裁量に任されるようになり、専門教育の強化の傾向が強まり、従来の一般教育を再編・縮小し、代わって既存の学問分野の名を冠しない主題、総合などの名のつく科目形式をとるところが増えていように見受けられる。学部や学科再編も行われ、大学教育においても自由化・個性化が始まったといえよう。

もともと一般教育は、専門一辺倒の戦前の高等教育に対する反省から、専門教育とは別に、広い

視野にたって総合的に判断するための教養を育成するものとして設置された。一般教育設置当時と現在とでは、それを取り巻く状況は大きく変化した。教育の分野に限ってみた場合、最大の変化は進学率の上昇であろう。高等教育への進学率は、1960年には1割前後であったのが、現在では5割近くに達し、4年制大学だけでも約3分の1にのぼる。

初等・中等教育においては学習指導要領が度々改訂され、良くも悪くも時代に対応した教育への軌道修正がなされてきたといえよう。一方、大学は新制大学制度が導入されて以来、一部の改正を除いて大きなカリキュラム改革もないまま約半世紀の時を経て、今般の改革となったのである。大学の大衆化、学生の多様化はすでに現実化しており、その是非はともかく、現状に目を向けないまま腕をこまねいているわけにはいかない。現状に即した改善が求められていることはいうまでもない。

(2) 教養教育の今日的意義

筆者は大学の大綱化に異議を唱えるものではないが、大綱化が一般教育、いいかえれば教養教育の否定を意味するものとは思わない。昨今の大学の大衆化を鑑みれば、教養教育の意義はむしろ増大しているのではないだろうか。

教養教育の今日的意義として、第一に、勉強から学問・研究への橋渡しの役割をあげたい。高校までの受け身的な授業に慣れ、主体的に学習する姿勢が身につけていない学生も少なくない。彼らに、諸学問・科学の体系や特定テーマの研究成果を論じても効果は期待できない。むしろ、学問とは何か、研究と勉強の違いはどういうことか、そして主体的に学ぶことの楽しさと意義、その基本的な姿勢を理解させる啓蒙的な役割である。

第二に、学生の新たな興味・関心、いいかえれば知的好奇心を喚起し、学習・研究対象の発掘の動機付けとしての役割があげられる。学生は特定の学問・科学の高等教育を求めて進学するものばかりではなくなっている。専攻についての明確な

ビジョンを持たないまま入学してくる学生もいるだろう。学部は選択したものの、自分は何をやりたいかはっきりしない学生も少なくないのではないか。大学はある意味で目標探しの場になっているともいえよう。こうした現状をふまえて、教養教育が彼らの目標探しの手助けをする場として機能することが求められているのではないだろうか。

第三に、広い視野にたつてものごとを総合的に判断することの重要性を認識させることがあげられよう。専門教育において個々の専攻の学問・科学の専門性・独自性を学ぶ前に、総合の重要性について考える場を提供することは、教養教育の重要な役割であろう。

このように、教養教育の今日的意義は、個別学問・科学の体系の基礎知識を幅広く身につけることよりも、学問・科学についての思考の場、ひいては人間や人生について思考することに収斂されるような場として機能し、学生を啓発することにあるのではないだろうか。

(3) 教養教育としての地理学

教養教育において地理学はその特性を活かしてどのような可能性を発揮しうのだろうか。教養教育の今日的意義をふまえて、教養教育としての地理学の有効性について考えてみたい。

教養教育の各科目は半年～一年という限られた期間で行われるものであり、各科目の授業から目に見える成果を求めること自体に限界があるが、学生の立場から考えれば、それぞれの授業から何らかの手応えが得られることに越したことはなからう。

地理学の授業では、多様な形態が可能である。講義ばかりで授業を構成せず、作業を適宜導入することによって、主体性を身につけるトレーニングができる。多様なアプローチの方法があることから、一つの課題でも個に応じた取り組みが可能である。地図等に表現したり、簡単な調査活動を導入することにより、成果を実感しやすいことも利点であろう。

教養教育の役割について先にあげたが、勉強から学問・研究への橋渡しとしての役割においても地理学は有効であるとみなされる。地理学を専門として研究しようというものは多くないかもしれないが、自分は多少なりとも地理を勉強したことがあると考える学生は少なくないはずである。教

養教育における地理学を、初等・中等教育における教科目としての地理の勉強と比較しながらみていくことは、勉強から学問・研究へのプロセスをつかむ手助けとなろう。また、地理学の長い歴史は、学問の発展過程、分化と総合などの問題を考えるのに格好の教材になりうると考えられる。

総合的に判断することの重要性を認識させることも教養教育の役割として先にあげた。しかし、すべての学問・科学を均等にまんべんなく学ばせるやり方には賛成できない。さまざまな学問・科学を幅広く「教養」として身につけることが、即ち広い視野や総合的判断力を備えることとは必ずしもいえないと思われる。また、学問体系をはずしたテーマ別の編成にも疑問が残る。あれもこれもと総花的情報提供にとどまって、多様な学問分野からの取り組みを統合する場がなければ、それは単なる知識の羅列に終わってしまい、生きた知力の育成の場とはならないだろう。地理学は様々な学問・科学分野の統合の重要性を認識させるとともに、統合の視点を提示しうるのでないだろうか。なぜなら、地理学は自然と人文・社会科学にまたがり、関連諸科学と視点や方法において共有する部分をもっている。柔軟性に富み、関連諸科学との連携を図りやすい。したがって、ひとつの主題を扱うにもさまざまな視点や方法を持ち、そこから他の分野に応用が利き、あるいは他の分野に発展しうる。このことにより、教養教育の役割のひとつにあげた目標探しの場としても機能しうると思われる。

以上のように、地理学の授業は教養教育の役割を担うのに適していると考えられる。もちろん、教養教育は様々な定義があろうし、多様な形態が考えられ、画一的にこうでなければならぬと論じるものではないが、地理学は教養教育に貢献する力もちうると考えられる。

(4) 授業研究の意義

初等・中等教育においては、教科研究や授業研究あるいは授業評価といったことは、程度の差こそあれ、授業計画 - 実践 - 評価という流れのなかで当然のこととして行われ、各教科目ごとに長年の研究蓄積がある。

教養教育は高等教育に位置づけられるにしても、その性格からいえば、中等教育までのような授業研究が必要であると思われる。一般教育の縮小化

の背景のひとつに、個々の授業の横の交流が不十分で、教養としてそれらを統合する場が欠けていたことがあるのではないだろうか。これはカリキュラム上の問題でもあるが、それに加えて、「授業研究を積み重ね、研究成果を共有し、実践に活かす」という、いうなれば教育現場としてあたりまえのことが、十分に行われてこなかったことも一因しているのではないだろうか。

分野の異なる諸学問・科学の授業を画一的な授業点検評価で測ることは疑問であるが、少なくともそれぞれの学問・科学分野における授業研究や情報交換は意義があると思われる。個々の授業者が個人的に行っていた授業研究の成果を、もっと共有しあい評価しあえる場があったなら、いいかえれば、各学問・科学の専門分野において、一般教育がひとつの研究分野として確立していれば、一般教育はもっと違う方向に進んでいたかもしれない。

地理学は自然・人文・社会科学にまたがり、多様な授業内容・方法が可能である。その特性を活かして、広く地理学の成果のなかから教養教育に適した内容と方法を取り込んだ授業を構成していくことが肝要であると思われる。前述したように、教養教育に対する地理学の貢献度は決して小さなものではないと考えられる。授業研究の蓄積と共有により、教養教育の地理学の体系化を図ることが、教養教育としての地理学の発展につながるのではないだろうか。筆者はさしたる実践の蓄積もなく、授業研究として報告する段階には至っていないが、あえて試行錯誤のプロセス、教養の地理学の授業研究の試案として提起したい。

3. 教養の地理学の授業実践報告

ひとくちに教養の地理学といっても、授業のねらいは同じでも、受講者の構成や人数に応じて、教材を組み替えたり、作業に軽重をつけたり、というように、実際の授業は当然変わってくる。ここでは、一つの事例として、茨城大学における授業実践について報告したい。

(1) 授業の位置づけ

本実践は1995年度の教養教育科目の授業である。カリキュラム改革の途上にあった同年度の教育課程は、教養教育と専門教育で編成され、教養教育は、共通基礎科目および主題別科目からなる教

養科目によっておこなわれた。主題別科目は分野別科目、総合科目、主題別ゼミナールによって構成され、このうち分野別科目は人文系、社会系および自然系の3つの分野からなり、地理学関係の授業は社会系に開設されていた。なお、総合科目にも地理学教員による授業が開設されていた。

本授業は分野別科目に属する地理学の授業の一つで、人文地理学入門と題する前期・後期2単位ずつ、人文学部、理学部の1年生を対象とする授業であった。本大学は人文・教育・理・工学・農学部からなるが、人文・理学部以外の学部生向けの地理学の授業は別に開講されていた。

(2) 学生の実態と授業の構成

学生は少なくとも専攻学部については受験時に選択している。専攻に関連する授業ならまだしも、理学部の学生が教養の人文・社会系科目をとることに、あるいは人文学部の学生が教養の自然系科目をとることに、明確な目的意識を求めるほうが無理というものであろう。従って、漫然と授業を選択したであろう多くの学生に対して、授業のねらいをはっきり示すことが肝要である。学生向け講義概要には、本授業のねらいと概要について別表のように載せた。

表 授業のねらいと概要—1995年度講義概要より

<p>主題 人文地理学 授業題目 人文地理学入門Ⅰ・Ⅱ 1 この授業のねらい 人文地理学の視点や研究方法の基礎や最近の研究動向を知り、地理学に親しむ。 2 授業の概要 地理学は、教育学部、あるいは文学部、理学部など大学によって所属がさまざまである。このことからわかるように、地理学の研究領域は広く、対象も方法も多様である。その歴史は古く、人類の歴史とともにあり、「諸学の母」ともいわれた。また、最近では、メンタルマップやタイムジオグラフィ、あるいはGISなど新しい分野も開拓されている。授業では、人文地理学の見方・考え方や研究方法の基礎について平易に紹介していくとともに、最近の研究成果も取り入れたい。受講者による作業活動を織り込みながら授業を進めていく。 今日、地域や環境をめぐる問題は複雑・多様化かつ深刻化している。諸学の専門・細分化が進む一方で、多岐にわたる問題の解決には諸学の研究成果を総合する必要性があることが論じられている。こうした状況下、地理学の視点と手法の有用性を認識するとともに、地理学の魅力を知ってもらいたい。(以下授業計画、留意点は省略)</p>
--

受講生のうち、高校における地理の履修者は全体の約35%、地理に対するイメージはいわゆる暗記、物産地理のイメージが強い。積極的に本授業を選択したというよりも、時間割の関係で選んだという消極的な理由の学生が多いとみなされる。人文学部と理学部の割合はほぼ同じで、履修者は前期約110名、後期約150名。大部分が1年生である。授業時間は木曜第2校時、10:40~12:10。

1年生にとって、とりわけ入学当初は、1時間30分の授業はかなり長く感じるものと思われる。前期はじめはできるだけ身近な教材を使った作業を取り入れ、単調な講義中心の授業にならないように工夫した。作業を通して主体的に学び、そこから課題を発見する訓練ができるよう、また、地理に対する既存のイメージを払拭させることを心がけた。後期は講義を中心とし、高校の授業と大学の授業はどこが違うのか、いかにすれば勉強と研究の違いは何かということを考える場となるよう留意し、じっくり考えること、専門に取り組む姿勢の準備、ということ意識して授業を構成した。

前年の1994年度は半期のみ授業であったが、内容を盛り込みすぎて網羅的、表面的になってしまったことが反省点としてあげられる。そこで、本年度は、前年度取り上げた地理学略史、地域調査法、そして農業立地論、工業立地論などの基礎理論等については割愛し、前年度1回の授業で扱ったものを、2回以上の授業時間をかけてゆとりをもって行うことにした。また、タイムジオグラフィ、地理学と地理教育というテーマを新たに加えた。なお、前期に作業を大幅に増やした。

(3) 授業展開

①前期

教養教育の地理学として、ひとつには地理学の技能面に着目した授業展開が考えられる。前期は、地図を媒体に地理学の基本的な見方・考え方についての理解を図るとともに、作業を取り入れることによって、技能の習得もねらった。前半は、統計や分布図などを用いた作業をしながら、受講者が「〇〇した」結果、「〇〇できた」という達成感が得られるような授業をめざした。後半は地形図や絵図などを使って、過去の景観を復元したり、変容をたどる作業をおこない、また、自ら主題図を作成する課題を課した。

教科書は用いず、プリント資料を用意し、毎回

配布する形で進めた。各テーマ1~2回の授業からなる。授業中の作業、宿題のレポート、期末試験を成績評価の対象とした。

授業テーマは以下の通りである。

1 オリエンテーション

2 分布図を読む・統計を読む

具体的な分布図や統計を使って作業をしながら、事象の分布に着目するという地理学の基本、その視点、方法、意義についての理解を図る。

3 世界地図を読む

各自世界地図を描いて実際との差異、描く人による差異に着目する。次に古代からの世界に残る世界地図の変遷をたどり、そこに描かれた世界像を読みとる。

4 水戸を読む

水戸の地図を描く。水戸のイメージをのべる。

新旧地形図、鳥瞰図などから水戸の街の成り立ち、変容を理解する。

水戸の街を歩き、主題図をつくる。(6の授業の後の課題)

6 絵図を読む

水戸の江戸時代の城下町の絵図から城下町の成り立ちを知り、現状と比較する。

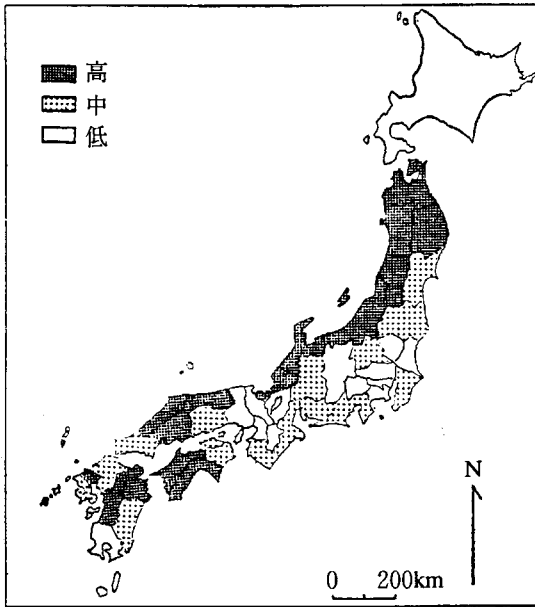
7 景観を読む

茨城県その他の地域のなかから特徴的な景観をもつ地域の地形図を使って、景観とその変容を読みとる。

8 地理学と教養

地理学の大まかな歴史、分類についてふれ、学問の発展過程について考えるとともに、総合力の意義、一般教育の意義について考える。

ここでは上記のテーマ2の授業の展開の概略を説明する。教材には、一般教養向けの教科書などでもよく引用される鈴木秀夫氏の離婚率と冬の気候の分布の一致説を利用した(『風土の構造』古今書院、1975、pp.133~143.)。都道府県別の戦前の離婚率の分布図が冬の気候の分布と一致することから両者の関係を説くものである。分布の一致の論理を理解させるのに適した教材にみられるが、学生は意外なところでつまづく。そもそも離婚率とはなにか。氏の引用図はその説明もないし、図の階級区分の根拠の説明もない。いわゆる統計上の離婚率は人口あたりの離婚件数で示される。ところが、学生に予想させると、結婚件数あたり



離婚率の高低分布(1919~35) (白井 1963)
(鈴木秀夫「風土の構造」P.135より)

の離婚件数、世帯数あたりの離婚件数など様々な意見が出される。人口の年齢構成によって違ってくるのは当然で、どれも問題があるという指摘もある。結局正確に離婚率など出せないという結論になってしまうのだが、この思考の過程が大切であると考えている。教材から読みとるべき趣旨はその問題ではないというのは授業者の論理であって、それを棚に上げた展開は学生を説得する力をもたない。資料としての限界性をふまえたうえで、現代の離婚率に地域差はあるかという新たな課題をだしてその仮説・検証を行った。なお、新聞の三大成人病死亡率の記事を例に、地域間の比較をより性格に行うために人口構成を一定に置き換えはじき出す年齢調整について補足するとともに、いくつかの新聞の分布図を使った記事を利用して、分布図の階級区分のしかた、表現方法などにもふれた。以上のような展開で、分布に着目して考えるという地理学の基本的視点と方法、分布のデータとなる統計の特性と限界性についての理解を図った。なお、このなかで、仮説・検証は宿題として課し、テーマ終了時に提出させた。

②後期

後期は講義形式をとり、人文地理学についても少し深く絞り込み、都市を媒体に、過去と現在の比較、西洋と東洋の比較、現代社会の問題への応用、人間の行動・心理・思考、学問の体系などのテーマへの発展を試みた。前期のねらいの一つが地理に対する従来のイメージの払拭とすれば、後期は地理学に新たな魅力を見いだしてもらうことをねらいの一つとした。統計や地形図などは使わず、人間の行動や意識などに着目した人文主義的地理学の視点や手法を取り入れた授業展開を試みた。都市を取り上げたのは、都市が様々な学問分野の研究対象となっており、その意味で教養教育の授業の題材として適していると考えられるからである。具体的には、歴史学や経済学、社会学への応用、あるいは理学部の学生の専門にも発展しうるテーマで以下のように構成した。

(授業のあらまし省略)

- 1 オリエンテーション
- 2 古代都市
- 3 中国と日本の古代都市
- 4 中世ヨーロッパの都市
- 5 北米の都市-都市の盛衰
- 6 都市の内部構造
- 7 都市のイメージ-メンタルマップ
- 8 タイム・ジオグラフィイー
- 9 行動地理学の応用
- 10 江戸の都市空間構造
- 11 風土と思考
- 12 地理学と地理教育

1 テーマはほぼ1回の授業で構成される。テーマ2, 4, 5はスライドやビデオを補助教材として利用した。前期のレポートを8で利用した。レポート、作業は課さなかった。成績評価は期末試験によって行った。

事後調査では、8・9で扱ったタイムジオグラフィイーに関する感想がもっとも多かった。授業では、時空間経路やプリズム、バンドルなどの時間地理学の基本的方法については、大学に通学する学生を例に説明した。時空間を表す図に、まず新鮮さから興味を引いたようであるが、ここで強調したのは、その手法よりも、タイムジオグラフィイーが生まれた背景とその応用についてである。つまり、様々な制約条件のなかで、人間がよりよ

い生活を実現するための改善の策を練る手段として生まれ、実際そのために利用された事例を示すことによって、学問の社会への貢献と応用の意義への理解を図った。

(4) 評価と考察

前期の授業の事後調査で、授業についての感想を訊いた。

・レポートが多くて大変だったが、手作業が多くて楽しく授業ができた。

作業・宿題が多かったが、「課題が多すぎた。」という不満もあったものの、数としては肯定的な意見が圧倒的に多かった。

・覚えるのではなく、考えたり、調べたりするのが新鮮だった。

・地図から読みとれるさまざまなことが興味深かった。

・水戸のことがわかってよかった。

大半が新入生であり、水戸出身者が少ないことから、水戸についての地図を使っでの調査は実益を兼ねておおむね好評だった。

・わかりやすかった。難しくなかった。気楽に学べることがよかった。

という意見が複数ある一方で、

・導入部のうちに終わってしまったような物足りなさがあった。

・広く浅くといった感じでもっと深いことを知れたかった。

・人文地理学の概念の説明がほしい。

という意見もあった。こうした意見は理学部の学生に多くみられた。

・予想と違っておもしろくなかった。

この学生の場合どういう予想をしていたのかわからないが、

・高校の地理とは全然違っておもしろくなかった。

という学生の学校教育における教科地理についての記述は、「勉強しなくてもいい成績がとれる教科で好きだった」とあった。

全体を通して、地理のイメージの転換を図るという目的、作業を通して地図に親しむという目的はおおむね達成できたと考えられる。しかし、もう少し絞り込んで深めるところが2,3あったほうが効果的であったようだ。作業がおおむね好評だったのは、1年次で他のレポートなどが少なく、負担とならなかったこと、テーマが身近な水戸に

関わること、作業も単純であることなどの影響もあると思われる。しかし、多くの課題が授業時間をこえての宿題の形をとって負担が大きくなってしまった。また結果を授業に活かせず、作業の意義が学生すべてに十分に伝わらなかったことが危惧される。

後期については、期末試験の問題の最後に「授業をふまえて、地理学の長所と短所について、あなたの考えを述べなさい」という質問を加えた。長所・短所という表現も的確とは思われず、試験では、強み、弱みといった表現で説明し直した。もともと授業で地理学の体系を論じたわけでもなく、専攻者でもない学生に対する質問としては重すぎるかもしれないが、授業を通して考えたことを整理して、地理学を通して学問・科学というものについて考えることを意図したものである。さまざまな回答が得られた。回答は授業内容を反映するものでもあり、学生の声そのものとはいえないかもしれない。しかし、授業が学生のどのような思考の場になったかを探る手がかりにはなると考えられる。

第一に、地理学を通して、学問あるいは科学とはなにか、その研究方法、研究対象、について考える場になったということである。第二に学問・科学の専門性・独自性とともに関連性の重要性について考える場になったということである(資料1~23参照)。地理学が、自然と人文・社会といった学問体系の分類におさまらない、それらにまたがる多様な研究対象をもつこと、研究方法も多様であり、さまざまな関連諸科学との共通性をもちながらも地理学の視点・方法をもつことを理解することによって、その利点とともに、その問題点を学生なりに評価している。とくに理学部の学生の地理学の方法上の問題点についての指摘が目立った(資料12~19)が、そのことによって自分の専攻を相対化させる場にもなったと考えられる。また、地理学を通して、学問・科学の系統化・細分化、学際化・総合化といった発展過程についての理解を図ることができたと考えられる。

第三に、学問の応用や社会への貢献について考える場になったということである(資料24~36参照)。「役に立つ」ということに対する学生の評価が高かったのは、地理は暗記物というイメージを払拭するために、タイムジオグラフィーなどの応

用について授業で強調したことの反映ともみられる。役に立つ＝長所、役に立たない＝短所、という学問・科学に対するステレオタイプの評価には問題が残るが、学問・科学の目的を考えるという点では意義あることと思われる。

以上のように、前期・後期を通して、総じて所期の目的は達し得たと考えられる。前期は地理学の技能面に重点をおいた授業展開とし、後期は人文主義的地理学の視点と手法に着目した授業構成とし、あえて性格の異なる2つのパターンを試みた。教養教育としての役割をどちらも有していると考えられるが、前期のパターンは、当然のことながら少人数の方が効果が上がり、多人数の大教室における授業ではどうしても相互交流の度合いが低くなってしまふことは否めない。一方、後期の授業は、試行的で実践では不十分な点多々あったが、地理学の特性を活かして教養教育として効果をあげる可能性の手応えをおぼろげながら掴むことができた。教養教育としての地理学のひとつの方向を示唆しているように思われる。

ともあれ、教養教育として学生の実態を把握し、学生の期待・要求と授業者のねらい・計画をどう調和させていくか、授業過程においても相互評価を怠らないことが大切であることを実感した。学生の教養の授業に対する期待は必ずしも大きなものではないかもしれないが、授業終了時に、学生が何らかの満足感、充足感を得ることができるような授業を目標としたものである。

4. おわりに

中等教育までの教科目としての地理、教員養成課程の教職科目としての地理学、そして新制大学における一般教育科目としての地理学、地理学は教育の分野において約半世紀にわたり安定した地位を確保してきた。1990年代に入ってから大学カリキュラム改革、高校における地理歴史科の誕生、さらには小・中学校における既存教科の再編・統合構想など、地理学を取り巻く教育界の状況はこれまでにない大きな変革の時期にある。地理学は今の状況を正しく認識し、あるべき方向を探ることが求められているといえるだろう。

大学においては、カリキュラム改革により一般教育は縮小の方向にあるが、大学の大衆化、学生

の多様化が進む現在、専門教育とは別に教養教育をおくことの意義はむしろ増大しているといえよう。自然・人文・社会科学という分類におさまらず、多くの学問・科学と関連をもつ地理学は、教養教育の役割を担うのに適した可能性を備えていると考えられる。教養教育におけるさまざまな地理学の授業実践の成果の研究・交流が進められ、教養の地理学がひとつの研究分野として確立することが望まれる。教養教育は地理学の特性を存分に発揮しうる可能性をもつ場であると思われる。地理学の活性化の糸口のひとつを教養の地理学に見いだせるかもしれない。

付記 本稿を作成するにあたり、茨城大学の朝野洋一先生、高木彰彦先生には大変お世話になりました。記して感謝申し上げます。

〔資料〕 学生の声

第3章で述べた授業実践における後期期末試験の最後の問題「授業をふまえて、地理学の長所と短所について、あなたの考えを述べなさい」は、個々の学生の成績評価のための問題というよりも、学生が授業を振りかえり、個々に授業のまとめをする場を提供することを意図したものであり、また授業者からいえば、実施した授業に対する自己点検としての意味合いが強かった。実際、授業評価として大いに参考になるものであったが、図らずも、地理学のあり方にも一石を投じるような文言がそこには散りばめられていた。例えば、「地理学の独自性が失われることよりも、むしろひとつの分野として孤立してしまうことが問題なのではないか。」

「地理学で独立するより、他の科学分野と共同研究の方がよりよい方向に向かうのではないか。」

「他の分野とのつながりを深めること、吸収は合併ではなく、連帯が必要。」

「いろいろな分野を結びつける役割をもっと積極的に行うべき。」

「どのようにすれば人が快適に住めるかという視点は・・・地球全体を人間のために余すところなく有効利用しようとする人間本意な考えになってしまう。」

「先進国の視点でしか地理学が研究されていないのでは。」

「総合の学問であるが、個々の研究は接点をもたない。」

といった鋭い指摘が散見される。

学生の素直で柔軟な生の声が、一番身近でかつ貴重な助言に聞こえてきた。資料としてその学生の生の声を、一部ではあるが以下に提示する。原則として加工はしていないが、紙面の都合上、大部分が抜粋である。便宜上大まかに分類し、番号を付した。(Lは人文学部生、Sは理学部生、順不同)

(地理学の研究対象について)

1(L)人間が生きている土地についての学問であるから、学問自体が生きていると思う。

2(L)地理学はあらゆる学問の起源とされているため、どんな分野でも利用することができると思う。物理的なものから、人の心理を扱ったものまでさまざまである。しかしその全体的な学問を細分化して利用するのもそんなに悪いことではないように思う。地理学はそれをみる方向によって長所が短所になったりその逆がおこったりする。

3(L)地理学は対象がはっきりしていないところがあり、それは短所でもあり、研究対象が広いということでは長所でもあると思う。

4(L)地理学の守備範囲はとてつもなく広い。長所と短所はその広さにある。様々なものがカバーできる反面、その区分が複雑になりわかりにくい。

5(L)長所は自然系も人文系も含まれているため、幅広く研究できることだと思う。短所は様々な分野が含まれていることによって、どっちつかずの学問になっていることだと思う。

6(L)地理学は他の分野と共有する部分が多いので、幅広く学べてマクロな視点が養われることである。一方、短所は他の分野と重なることが多いために、独自性に欠け、はっきり定義するのが難しいところである。

7(L)地理学は母なる学問と呼ばれるにふさわしく実に様々な学問の要素を含んでおり、総合的な学問である。総合的でまた現実的な能力が身につけられる点では長所だが、また短所であると思う。総合的で様々な学問を含むため、その立場が中途半端となってしまっている。日本はどうしても専

門的な知識を求める傾向が強いためだろう。社会科学においてもそれがみられる。しかし地理学はこれから発展すべき学問であると思う。国際化がますます進み、これから求められる人材は専門的知識を持つ人よりもマクロな総合的な知識を持ちその視点で様々なことに対処できる人間であると思う。

8(L)地理学は自然・社会などすべての分野に関係している学問であり、総合的な学問である。日本の学問はどちらかというと専門的で分野別にはっきりと区別されることが多い。しかしそれでは生活に密着した学問の成果を上げることはできないのではないかと思う。広い分野に関係しているからといって大ざっぱな研究になってしまったり、表面上の学問になってしまう点が短所だと思う。

9(S)地理学といっても個々の取り組む対象・分野は違い、それらの接点を見つけにくく、一貫性に欠ける場合も少なくないと思われる。総合の学問であるが、個々の研究は接点をもたない。

10(S)地理学は範囲が広いのが長所だが、地理学の中で横のつながりが薄いのが短所だと思う。

11(S)地理学は幅が広いので深く突き詰めるには難しい。都市がどのようにできたかそこにいる人間はどのような人間か、まず文化を調べる。それは文化人類学の方が上手だし、歴史は歴史学、経済は経済学のほうがいい。深く狭くという学者のようなタイプには向いていないような気がする。

(地理学の視点と方法について)

12(S)物理学とくらべると誰にでも分かりやすい。一般の人に専門的な話をしてもある程度理解できる。それだけ地理学が人間にとっても身近にある。しかし、物理学では数字や記号に置き換えられ、答えがいつでもどこでも同じである。地理学では答えにばらつきがある。

13(S)地理学は幅広いものであってどの分野からも調べたり研究したりできる。しかしひとつのものに関して、調べ方によって必ずしも同じ結果にならないことが長所であり短所だと思う。

14(S)地理学は大きな視点から見る。自然地理学は地球全体、人文地理学は都市、街といった単位のものからある程度個人単位のものまでであるが、人それぞれといった個人レベルの考え方や生き方を尊重せず統計的になってしまうのが、長所であ

り短所であると思う。

15(S)地理学の対象が地形やその自然気候であるときは確実な情報を取り寄せることができるが、人間の精神的な分野が関わってくるとどうしても不確実な情報となってしまう。

16(S)対象が人間を用いるので何度も繰り返し確かめなければならない。

17(S)研究方法がアンケートや調査文献調べなど手の掛かるものであるということ、対象になる物事の細かいところまでは書き表せない。

18(S)短所は「こういう傾向にある」を「こういうものだ」と結論付けをしてしまうことだ。

19(S)地理学の短所はある一回のデータがいつまでも使えるわけではないこと。長所はその逆で、年々のデータが残るので、(データを蓄積することによって)後にある程度推測することができるということ。時間と合わせることでより立体的な空間まで見えること。

20(S)工学のような技術的な学問と違ってふだんの生活そのものが対象となりうるので、身近な学問という印象を受けるが、かえって新しい事実や理論が見えにくかったり、見逃していたりするのではないかと思う。

21(L)地図や自然条件がもとになって研究されるから、憶測にしか過ぎないということもあり、確実性に欠ける。

22(L)地理学は総合的な学問で、多様であるため、地理学として一般にいえる理論はだしにくく、軽んじられやすい。

23(S)やはり地理より理科が面白い。何で人間がやったことを考えて面白いのか。人間の及びもつかないものがやったこと決めたことを考えたい。(地理学の応用について)

24(L)長所は様々なアプローチによって様々な対象を研究していることから、その研究結果を広範な領域、分野に応用できることであると思う。しかし、日本の学校教育では地理は社会科学の中の1科目として組み込まれ、あまり重要視されていない。

25(S)公共施設の建設や交通計画に応用し生活を便利にすることができる。

26(L)長所は何よりもその実用性、いわば現代風水とも呼べるものかもしれない。

27(L)地理学は地名や各地の特色、文化などを学

ぶ学問だと思っていた。タイムジオグラフィーによる都市計画などの例をみて学問で役に立つものだと実感した。

28(L)タイムジオグラフィーなど人と空間と時間を合わせて、そこからよりよい生活を考えたりもできるという新たな面をみて驚いた。地理は総合的で国際的な視野をもつ面は長所であると思う。29(L)活用の仕方を多くの人々が知らず、あまり普及していない。

30(L)いろいろなものに応用できるが、応用の仕方などが知られていない。

31(L)歴史的事項をみていく上でも人間のみを考えるのではなく自然が与えた要因をも考えるという方が理解がぐっとしやすくなってすばらしいと思う。ただ、研究から導き出したものを研究のみにとどめてしまいがちではないか。現在への応用がなされているのを身近に感じるのがあまりない。

32(L)研究してわかったことを今の生活に役立てていないのではないか。

33(S)比較的地味ということが短所。地理学だけに利用せず他の分野にも応用していけば、かなり面白くかつ役に立つであろう。

34(S)理想的な都市形態を考えることは可能だが、それを現実にするには様々な条件を満たさなくてはならず容易ではない。理想と現実とのギャップが地理学の長所と短所ではないか。

35(L)地理学は現地調査ばかりの学問ではなく、自然と人間の関わりをも考慮した学問であり、立体的なものを紙面にあらわして分かりやすくできるという長所があるが、紙面から人々の生活に活かす場合になかなか現実のものにできないという短所がある。

36(S)どのようにすれば人が快適に住めるかという視点が地理学の全体の見方なのではないか。それに基づいて農業などについても調べていくのだろうと思うが、そうすると地球全体を人間のために余すところなく有効利用しようという人間本意な考えになってしまう。

(地理学の今後について)

37(L)地理学の今日のようなマイナー性は学校教育によるものであると思う。地理学の実社会への貢献度や利用法が国民に広まる機会は教育を除いては他にない。地理学の視点や対象は他の専門的

学問と重なることが多く、それなら専門の方がということになってしまう。しかし多くのことについて総合的に学べるということは大きな利点であり、これからの世の中で求められていくことであろう。地理学は人が生きていく上で決して消滅し得ない分野であるからその有効性を世の中にもっと広めていくことは必要なことであると思う。

38(S)短所は地理学があまり人に知られていないところ。役に立つ研究をいっぱいしているのに、私にとって地理は地図を覚えたり、地形を覚えたりというあまり面白くないものだという意識があった。こう思っている人はもっといると思う。だから、研究成果をもっと一般に広めるべきである。

39(S)地理学は地理学で独立するよりも、他の科学分野と共同研究するほうがよりよい方向に向かうのではないかと思う。

40(L)地理学の独立性が失われることよりも、むしろひとつの分野として孤立してしまうことが問題なのではないかと思う。現在は学問分野の垣根が低くなりつつある。またそうなるべき時期ではないだろうか。とすれば、地理学が学問としての地位と存在意義を保つには、他の分野とのつながりを深めること、吸収は合併ではなく、連帯が必要であると思う。

41(L)細かく分かれている様々な分野と交流しやすい学問ではないか。

42(S)地理としての授業はなくてもそれぞれの分野でその内容は組み込まれています。地理とは地図を通していろいろな学問分野を結ぶものなのではないでしょうか。いろいろな専門分野をむすびつける役割をもっと積極的になって行くべきだと

思います。

43(L)地理学は先進国で発達していることが多いので、先進国の視点でしか、地理学が研究されないのは短所であると思う。

44(L)国際的な地理学も重要だがそれぞれの土地に密着した地理学も重要だと思う。

45(L)細かいデータによりミクロにもものが考えられる。また全体像を通してマクロにもものが考えられる。過去におこったことだけでなく未来におこりうるところまで予想できる。ただ一般の人がぱっとみただけではわかりにくいのが難点。地理学は今までの過去のようにからみても人の生活に重宝されるものである。学問的なものに向かうのもいいが、実用的なものもさらに改良して欲しい。

46(L)地理学は自然科学的な要素だけでなく、人間の行動に着目した人文科学的な要素も持っているという点で、非常に可能性が広がる学問であると思う。人間の生活はその存在基盤である地形に成り立っていると同時にその地形も人間の生活のために変化していくものである。それは人間と地理が相互に深く関連し決して表面的なものだけではないということである。だから社会の中の交通システムや公共施設の配置などの計画にとどまらず、民族の違いにおけるその土地利用などにも応用できるのではないだろうか。しかしその反面、地理学は結果の学問、または現状把握の傾向を強くもつように思う。だから少しずつ使われ始めた計画としての前進性をもった部分もこれからは伸ばす必要があるのではないだろうか。それは環境改善に向けての人間行動の理想的な生活の仕方や地域の土地利用に対しての方針を地理の歴史的、科学的な点から示すようなことである。